



高橋余一の「生活絵巻」



上の絵に書かれた文章

室内は、紙張（しちやう）丈夫な
美濃紙で耳までついた
一間に二間 丁度今の
ビニール温床に使ふよ
うなもの（を）張つて全
ての蚕具を入れる
消毒を終ると出入口を
目張りして一週間位そ
のまゝにして置く

給桑ザル
桑切包丁と羽簞

25 蚕室の消毒

明治期から昭和期にかけて、美濃加茂は養蚕を営む家がとても多くありました。繭ができるのと製糸工場や問屋へ売りに行きました。貴重な現金収入となったため、カイコのことを「オカイコサマ」と呼びました。また春に飼うカイコは「春蚕（はるこ）」と言いました。カイコは、普段、人間が寝食をする部屋に飼育のための棚（目棚）を作り付けて飼いました。飼育の間、人は縁側や土間、納戸で寝起きし、食事などもそこでした。病気になるって繭ができないと収入が見込めないことから飼う前には部屋を薬品で消毒し、細心の注意を払いました。そして、繭ができるまで、家族総出で世話をしました。

※文化の森では、6月1日回まで美濃加茂の養蚕を紹介した企画展「里山のオカイコサマ展 ―美濃加茂の養蚕―」を開催しています